

オンライン授業への準備は どの程度整っていたのか ——中央大学文学部の調査より——

眞鍋倫子・辻 泉・及川淳子
中村菜々子・松田美佐・宮間純一

1. はじめに

2020年3月、世界的な新型コロナウイルス（covid-19）の流行を受け、人が集まることによる感染拡大を防止することが求められるようになった。中央大学でも結果的に3月に行われるはずであった卒業式はきわめて小規模のものとなり、学位記の授与は郵送にて行われた。また2020年度の入学者への書類交付も郵送となり、入学式も中止となった。

また、2月27日に安倍内閣総理大臣（当時）が、全国の小中高校に対して、3月2日から春季休業期間までの休校を要請し、多くの都道府県教育委員会および学校がそれに従って休校となった。その後、3月24日付で文部科学省教育高等教育局長からの「令和2年度における大学等の授業の開始等について（通知）」において、学事日程の取り扱いや、遠隔授業の活用といった点で、大学設置基準の弾力的運用を可能にするに至った。これによって、4月から始まる新年度をどのように始められるのか、具体的に何ができるのかという条件が整備され、各大学でも検討がスタートした。

卒業式や入学式といった儀式的場はともかく、授業は大学の本分である。

授業についてオンライン授業によって集合型の授業を回避し、感染拡大を防ぐという課題は、中央大学に限らず、他の国公私立大学においても同様であった。授業開始が4月初頭であった東京大学をはじめ、多くの大学が3月からオンライン授業を導入するための取り組みを始めていた。しかし、ほとんどの大学において、前年度に予定していた授業開始日までに間に合わせることは困難であった。そのため、授業開始日を5月の大型連休明けにずらし、4月中旬にオンライン授業の準備を行うという大学が多くみられた。

中央大学においても、4月1日に学長名で「2020年度学年歴の執行（暦の一部変更を含む）に関する方針について（決定の報告）」が出され、当初の授業開始日から2週間を「特別休講期間」とし、その後の4月22日から5月6日を「特別措置期間」と定めた。「特別措置期間」には、集合型の授業を行わないとし、「多様なメディアを活用したオンライン授業」を行うとした。

このように、オンライン授業への流れが作られてきたが、ほとんどの大学教員にとって、「オンライン授業」は未経験のものであり、それがどのようなものなのか、実際に自分にできるのか、といった不安は非常に大きかった。

一方、学生にとっても、オンライン授業の導入は不安を増すものであった。また、キャンパスへの入構も禁止されたため、特に1年生においては、これまでの大学生活とは大きく異なる生活を余儀なくされたのである。

文学部では、3月末になって、これまでオンライン会議システムを使ったことのない教員が、自発的に周囲に呼びかけながらZoomの体験会を行うなどの取り組みが始まった。その後、大学がライセンス契約を結んだWebexの体験会を含め、10回の体験会を行いながら、その場でオンライン授業の実施方法などについて、参加した教員とのディスカッションを行った。

これらの動きは、4月の初めには文学部設置のワーキンググループ（以下WG）として承認を得て活動することになった。

このWGが最初に行ったことは、教員が現実的にどのような授業を提供することが可能であるか、また学生たちがオンラインで授業を受ける環境やスキルをどの程度持っているかという実態の把握であった。一般的にオンライン授業といえばイメージされるであろう、動画を配信するタイプの授業にせよ、オンライン会議システムを用いた同時双方向型の授業にせよ、教員は、それらを自宅で準備する必要がある。そこで、それらの授業を実際に行うためのインフラは整っているのかを把握することが喫緊の課題となった。

また、オンライン会議システムを用いる場合であっても、会議室のアドレスや資料の配付、学生の理解度の把握のためには、それとは別に、すでにあるLMS（Learning Management System、中央大学の場合にはmanaba）を利用する必要がある。また、授業を受ける（視聴する）、小レポートに回答する、テストを受けるといった行動が全てコンピューターおよびインターネット回線を経由することになる。その場合、教員および学生双方のコンピューター操作のスキルによっても、授業の実施および受講における課題が異なる。教員がどの程度、オンライン授業を実施するための基礎的条件を有しているのか、また学生がどの程度オンライン授業を受ける基礎的条件を持っており、どのような配慮が必要となるのかを把握することなしに、実際にすべての学生が受けることのできる授業をオンラインで提供することは困難である。そこで、文学部のWGでは、4月に入ってすぐに、教員向けと学生向けの調査を実施した。

また、ひとくちに「オンライン授業」といっても、その実施形態は様々である。テレビ会議システムを用いた同時双方向型の授業（双方向型）や、授業動画を配信するもの（動画配信型）、授業資料をオンライン上で配付

するもの（資料配布型）、課題を提示して自習させるもの（自習中心型）がある。実際のところ、これらの方式のうち教員がどの方式を用いたのか、それを学生がどう受講し、どのような学習に結びついたのかについても検証する必要があるだろう。そこで、例年、全学的に実施されている授業アンケートを文学部独自にオンライン授業に関する項目を追加して実施することで、半期を通じた教員の授業と学生の学習の把握を試みた。

本論文は、これらの教員・学生向けの調査および前期終了時点での授業アンケートによって、2020年度の前期のオンライン授業導入に関わる記録のために書かれたものである。

2. 調査の概要と枠組み

教員調査の質問項目は、オンライン授業に関わって必要な機材や授業支援ソフトなどの利用経歴などについて、メンバー内で検討した。

学生調査については、質問項目は、2020年3月下旬から4月にかけて東京大学で行われた「オンライン授業の実施に向けた学生アンケート」<https://utelecon.github.io/questionnaire/>を参考に作成した。

教員調査・学生調査の実施方法は以下の通りである。

- 1) 教員調査：4月上旬に、Google フォームを用い、文学部の科目担当の全教員に回答依頼を行った。2020年度（後期も含む）の授業担当教員の全数は526人であり、解答者は500人であり、回答率は95%と非常に高いものであった。オンライン授業への教員の危機感を表すものといえよう。

研究目的の調査ではなく、主に大学としての体制を整えるためのものであり、支援を行うための調査であったため、教員コード、氏名といった個人情報も同時に収集した。一部に重複回答をした教員がいたが、本分析用のデータセットの作成に際して重複者は古いデータを削

除した。また、分析に際して個人情報除外したデータセットを作成した。

2) 学生調査：アンケートは4月初旬にオンラインを通じて実施した。

1年生については学内ポータルへの接続が可能になる時期を考慮し、Google フォームを用いて実施し、2年生以上は学内ポータルであるC-plus を通じて実施した。回答の呼びかけは学部ホームページやC-plus, 2年生以上についてはmanaba などを通じて行った。

学生調査の回答者数は2504名であり、2020年4月1日時点の在籍者数3839人に対する回答率は65.2%であった。以下で記述する授業アンケートへの回答率と比べてもかなり高い回答率となっており、学生にとっても、オンライン授業が重要な関心事であったと思われる。

また、事後的な支援を想定していたため、1年生については学籍番号または受験番号の回答を求めた。2年生以上については、調査項目には学籍番号など個人情報は入っていないが、回答が学内ポータルの登録情報と関連づけられていた。ただし、本分析にあたってはこれらの個人情報を削除したデータセットを用いて分析を行った。

3) 授業アンケート：2020年度前期に文学部で開講された授業科目（教職・資格科目を含む）の履修者を対象に、7月2日～31日の間に、manaba上にて実施された。ただし、卒業論文、教育実習、グローバル・スタディーズ、大学院履修科目、学部間共通科目は主設置学部において実施することとし、また個別のアンケートを実施する科目（大学生の基礎（1）、キャリアデザイン（1））は除外された結果、1036科目が対象となり、そのうち995科目で実施された。延べにして44209名中15435名分の回答が寄せられ（回答率は36.6%）、近年と比べると回答率が向上しており（これまではおおむね20%程度で推移）、この点はオンライン授業のメリットといえるのかもしれない。ただしそれ

でも半数に達しておらず、回答率を向上させるための取り組みについては、引き続き検討する必要があるだろう。以降は、主に無回答を除いた分析結果を紹介するが、その結果の解釈においては、アンケートに回答するようなやや熱心なタイプの学生の傾向を反映したものである可能性を加味しておく必要はあるだろう。なお、全体的には全学的に共通フォーマット化された項目がベースとなっていたが、一部、文学部でオリジナルに、オンライン授業を踏まえた内容に改変を加えた項目も加味することとなった。その内容の検討に際しては、複数の専攻から教員が集まり、WGにおいて行われた。

3. 教員調査の結果

教員調査は、大きく3つのパートに分かれている。①基本属性、②PCなどの機器やインターネット接続環境、③manabaやオンライン会議システムの利用状況である。質問は全9問で、最後の質問は自由記述回答である。

3.1. 基本属性

教員回答者の基本的な属性としては、専任か兼任か、および担当科目の所属専攻を尋ねた。まず、専任／兼任の別について確認した結果が表3-1である。回答から見ると、80.2%が兼任、19.8%が専任であった。学部の事務室で把握している専任／兼任教員数と照らし合わせたところ、専任については教員数よりもやや多い回答となっていた。これは他学部の専任教員が文学部においては兼任としてカウントされているために起こったことであろう。こういった事情を考慮したとしても、専任の回答率はほぼ100%であったといえる。他方、兼任についてはやや少なく92%程度の回答率であった。

表 3-1 教員の兼任／専任

	回答数	%	教員数 (N)
専任	99	19.8	97
兼任	401	80.2	435
計	500	100.0	526

表 3-2 所属専攻

	度数	%	専攻所属 教員数	%
国文学	25	5.0	23	4.4
英語文学文化	85	17.1	91	17.3
ドイツ語文学文化	32	6.4	37	7.0
フランス語文学文化	46	9.3	47	8.9
中国言語文学文化	31	6.2	36	6.8
日本史学	37	7.4	37	7.0
東洋史学	20	4.0	22	4.2
西洋史学	18	3.6	20	3.8
哲学	23	4.6	24	4.6
社会学	17	3.4	18	3.4
社会情報学	37	7.4	39	7.4
教育学	35	7.0	30	5.7
心理学	25	5.0	24	4.6
総合教育（体育含む）	37	7.4	50	9.5
教職課程	20	4.0	28	5.3
他学部	5	1.0		0.0
不明	4	0.8		0.0
計	497	100.0	526	100.0

次に、教員の所属専攻を確認したところ、表 3-2 のような結果となった。専任／兼任の別と同様、文学部事務室で集計している教員数についても掲載している。

事務が作成している専攻所属教員数との関係でいうと、総合教育科目や

教職科目では、所属をそれぞれの依頼元の専攻であると理解している教員もいることから、実際の所属に比べて少ない回答数となっている。逆に、専攻に所属する教員よりも回答した教員数が多い専攻として国文学、教育学、心理学専攻もあるが、これらの専攻は教職科目や総合教育科目の担当依頼を行っているため、教員自身は所属専攻としてこれらの専攻を選択したようである。

3.2. デバイスなどのハードウェアの環境について

上記のような専任／兼任や所属専攻といった基本属性を確認した上で、教員の PC 等の情報機器の所有状況や通信回線への接続環境を確認しておく。オンライン授業をスタートさせるためには、そのための情報端末やマイクやカメラといった機器、十分な通信回線が必須であるからである。

まずは、端末機器である PC やタブレットの保有状況について尋ねた結果、表 3-3 の通りとなった。

調査時点で 95% 程度の教員が専用 PC を所有しており、情報端末を全く所有していない教員は 1 名のみであった。

機器の所有を専任／兼任の別に見ると、専用 PC、共用 PC、キーボード付きのタブレット端末の所有率は専任のほうが高いが、キーボードのな

表 3-3 情報端末の有無

	N	%
専用 PC	474	94.8
共用 PC	56	11.2
タブレット（キーボード付き）	77	15.4
タブレット（キーボードなし）・スマートフォン	247	49.4
どれも持っていない	1	0.2
計	500	100.0

いタブレットやスマートフォンの所有率は兼任のほうが高い。ただし、「タブレット（キーボードなし）・スマートフォン」の所有率が50%程度というのは、現在の普及率と比べてやや低い。このことは、この回答が前半の「タブレット（キーボードなし）の所有」への反応であり、「スマートフォンの所有」については正確にはできていない可能性があると考えられる。

オンライン授業を実施するには、家族内などの共有ではなく、個人専用のPCを持っていることが必要と思われる。そこで、専用のPC所有を基準とし、それ以外にも端末を持っている教員と専用のPCを持たない（それ以外の端末を持っている場合もある）というカテゴリー分けを行った。「専用PCとタブレットを所有」「専用PCのみ所有」「共用PCまたはタブレットを所有」の3つのカテゴリーにリコードしたところ、以下のような分布となった。

専任・兼任にかかわらず、約半数の教員は専用PCとタブレット等の機器を持っており、十分な環境にあるといえよう。また、4割前後の教員が専用PCのみを持っており、あわせて95%程度がオンライン授業を実施する前提となる機器を持っていたことが分かる。他方で、オンライン授業を実施するには難しいと思われる、共用PCまたはタブレット等のみしかない教員が全体の5%程度おり、この5%の教員については、オンライン授業を実施するために、何らかの準備が必要であったと考えられる。

また、PCがあれば、manabaへの接続は可能であるが、オンライン会議

表3-4 専任／兼任別 情報端末の所有状況

	専任	兼任	計
専用PCとタブレット／スマートフォン	51.5%	54.4%	53.8%
専用PCのみ	45.5%	39.9%	41.0%
専用PCなし	3.0%	5.7%	5.2%
N	99	401	500

システムを利用したり動画を撮影するといったタイプの授業を展開するにはマイクやカメラが必要となる。

そこで Q4 で所有している PC やタブレット端末等に、オンラインで双方向授業を行うために必要なカメラおよびマイクが内蔵されているか、または外付けでの機器があるかを尋ねた。

内蔵か外付けかは関係なく、カメラがあるものは 78.6%、マイクがあるものは 61.6%であった。どちらもない教員が 9.6%と 1 割近くおり、「わからない」教員も 6.8%いる。「わからない」教員は、全体に様々な IT スキルにおいて、不十分な点があると考えられる。

Q5 についても「カメラ・マイクともにあり」「カメラのみあり」「マイクのみあり」「どちらもなし」に区分しなおして集計を行った結果が表 3-6 である。

表 3-6 をみると、調査時点で教員全体の 56.8%がカメラ・マイクともに所有していたことが分かった。しかし、どちらかのみ、またはどちらもない教員が 36.4%と 4 割近くおり、これらの教員は、オンラインで双方向型や動画配信といったタイプの講義を行う場合には、どちらか一方または両方を購入する必要があったと考えられる。専任では両方を持っている教員が 66.7%、両方とも持っていない教員はいなかったが、他方で兼任では両方を持っている教員が 54.4%と半数程度にとどまり、どちらもないと回答

表 3-5 マイク・カメラの所有状況 調査票 version

	度数	%
カメラあり (内蔵・外付け)	393	78.6
マイクあり (内蔵・外付け)	308	61.6
カメラもマイクもなし	48	9.6
わからない	34	6.8
計	500	100.0

表 3-6 マイク・カメラの所有状況 再集計 version

	専任	兼任	計
カメラ・マイクともあり	66.7%	54.4%	56.8%
カメラのみ	25.3%	20.0%	21.0%
マイクのみ	5.1%	4.5%	4.6%
カメラ・マイクともなし	0.0%	13.5%	10.8%
不明	3.0%	7.7%	6.8%
N	99	401	500

した教員が 13.5%とかなり多くなっている。

さて、オンライン授業を、自宅から、特にオンライン会議システムを利用して同時双方向で行う場合、インターネット回線への接続のための通信環境が必須条件となる。そこで次に、自宅の通信環境について確認を行った（表 3-7）。

教員全体の 75%程度が制限なくインターネット接続が可能な環境にあり、通信環境がないと回答した者はほとんどいなかった。しかし兼任では「わからない」という回答もあり、専任と比べると、自宅での通信環境がやや脆弱であったり、環境を確認することができていない教員が若干ではあることが分かった。これらの兼任への通信環境の提供といったサポートが必要であろう。

表 3-7 自宅の通信環境

	制限なし	制限あり	通信環境なし	わからない	N
専任	79.8%	20.2%	0.0%	0.0%	99
兼任	75.8%	22.5%	0.3%	1.5%	400
計	76.6%	22.0%	0.2%	1.2%	499

3.3. 教員のオンライン経験

では、教員たちは、オンライン授業を行うために使うことが想定されるツールについて、4月当初時点でどの程度の経験を持っていたのだろうか。Q7においてオンライン会議システム、Q8においてmanabaの多様なメニューのうち、それまでにどの程度を使っていたのかを見ていく。

まずは、オンライン会議システムについて、代表的なシステムの利用経験についての回答は表3-8のとおりである。

まず、教員全体について見ると、オンライン会議システムの経験については、Zoomが48.6%と最も多く、続いて「使ったことがない」が42.6%、Webexが19.0%と続く。また、Google Hangouts MeetやSkype、その他を使った経験がある教員が10%程度となっていた。

この質問への回答は、教員が専任か兼任かによって解答傾向の差が大きい。専任の場合、ZoomおよびWebexの経験率はそれぞれ81.8%、74.7%と7～8割が経験ありと回答し、どれも経験がない教員は8.1%であった。他方、兼任では、どれも経験がない教員が51.1%と半数を占めており、Zoomの経験率が40.4%、Webexの経験率は5.2%と専任と比べてかなり低い。この結果は、3月末から文学部の専任教員によって体験会などの研修機会が設けられていたことの成果であろう。兼任についても、調査実施

表3-8 オンライン会議システムの利用経験

	専任	兼任	計
Zoom	81.8%	40.4%	48.6%
Webex	74.7%	5.2%	19.0%
Google Hangouts Meet	15.2%	7.2%	8.8%
使ったことがない	8.1%	51.1%	42.6%
Skype	1.0%	5.7%	4.8%
その他	0.0%	2.2%	1.8%

時期以降に、専攻ごとに体験会や相談会が開かれたこともあり、その後経験率の差はかなりの程度縮小していると考えられる。

PC やマイク・カメラといったデバイスの所有との関連を見ると、特にデバイスを持っていない教員において、体験率が低いことが読み取れる。学生に対して、双方向性や同時性のある授業を提供していくには、デバイスのない教員にはデバイスを支給しつつ利用を促すといった取り組みも必要なのではないだろうか。

オンライン授業を行う上で、「双方向型」「動画配信型」「資料配布型」「自習中心型」のどの手法を用いるにせよ、会議室のアドレスや動画や資料の配付、自習課題の提示などを行い、また学習成果の回収やフィードバックを行うには、学内の LMS である manaba を用いることが必須になる。そこで、これまでに manaba のどの機能を使ったことがあるかを尋ねた結果が表 3-9 である。

教員全体で見ると、manaba を全く利用したことがない教員は 6.6% であった。しかし、専任兼任別に見ると、専任では 1% と、ほぼ全ての教員が利用したことがあるのに対して、兼任では 8.0% と 1 割近くが利用したことがないと回答している。

この質問への回答も、先のオンライン会議システムの経験率と同様、全体として、専任教員のほうがより利用率が高く、その差は統計的にも有意である。

最も経験率が高いのは「シラバス入稿」である。2016 年度より、manaba によるシラバス入稿が行われるようになっていたため、全教員の 9 割が「利用経験がある」と回答している。ただし、兼任教員の 1 割程度には利用経験がないと回答している。利用経験がない教員については、他の教員や事務によるサポート等がなされていると考えられる。

次に利用率が高いのは「コンテンツ」である。全体では 35.0% だが、専

表 3-9 manaba の利用経験

	専任	兼任	計
シラバス入稿	98.0%	89.3%	91.0%
コースニュース	48.5%	16.5%	22.8%
コンテンツ	66.7%	27.2%	35.0%
レポート	45.5%	18.2%	23.6%
小テスト	19.2%	4.7%	7.6%
アンケート	27.3%	11.2%	14.4%
掲示板	39.4%	16.2%	20.8%
respon	22.2%	7.7%	10.6%
経験なし	1.0%	8.0%	6.6%

任の 66.7%，兼任の 27.2% が利用経験があると回答している。

次いで、利用経験率が全体で 20% を超えているものは、「レポート」で専任 45.5%，兼任 18.2%，「コースニュース」で専任 48.5%，兼任 16.5%，「掲示板」で専任 39.4%，兼任 16.2% である。

経験率が最も低かったのは「小テスト」であり、専任でも 19.2%，兼任では 4.7% しか利用した経験がない。比較的新しい機能である「respon」も専任 22.2%，兼任 7.7%，全体でも 10.6% の利用にとどまっている。

manaba の機能の利用経験を合算したところ、図 3-1 および表 3-10 のような分布となった。

経験メニュー数が 0 の者は全体でも 6% 程度だが、兼任の半数は利用経験が 1 つのみとなっており、ほぼ「シラバスの入稿」のみに利用していると考えられる。他方、専任は平均メニュー数は 3.6 と高く分散は広く、変動係数を見ても、ばらつきが大きいことが分かる。

そもそも manaba には、学生に資料を提示するための機能である「コースニュース」「コンテンツ」と学生の学修成果を集約するための「小テスト」「レポート」、意見を聞くための「アンケート」「respon」、双方向的やり取

図 3-1 manaba のメニューの経験数

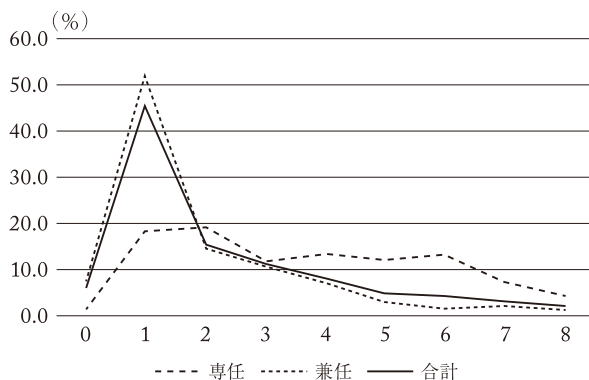


表 3-10 manaba メニューの利用経験

専任／兼任	平均値	標準偏差	変動係数	N
専任	3.67	2.133	0.582	99
兼任	1.91	1.642	0.860	401
計	2.26	1.883	0.834	500

りを可能にする「掲示板」と、機能に対して複数メニューが用意されていることから、専任教員の場合には、これらを自らの授業にあわせて利用できている状況にあると考えることが出来る。

まとめると、機器の所有に比べて、オンライン会議システムや LMS の利用については、専任の経験率が兼任よりもかなり高い傾向が見られた。専任教員においては、これまでに学部内の FD 研修等での manaba の使い方を教員が自身の事例を提示するなどの研修が行われており、これらの研修の効果も大きいものと考えられる。また、オンライン会議システムについても、3 月末からの体験会への参加を通じて利用経験率が高まっており、これらの研修を実施することの成果が見られる。しかし、他方でこれらの

研修が兼任には十分に届いておらず、今後もオンライン授業を行うことになるのであれば、兼任教員に対する研修機会の提供等が不可欠であろう。

他方、特に兼任教員については、複数大学での授業を担当している教員も多いことが想定される。今回の調査の範囲を超えるが、大学によって異なる LMS が導入されていることから、複数大学で授業を担当する教員の負担は非常に大きかったと考えられる。こういった負担の大きい教員や LMS 利用が困難な教員をサポートできる体制を構築することは、オンライン授業を行っていく上で、喫緊の課題だと思われる。

ここまで、教員調査の結果を見てきたが、全体を通じて、情報機器や通信環境といったハードウェアの面の整備状況も、オンライン会議システムや LMS 利用についても、専任に比べて兼任の条件が整っていなかった状況が見えた。しかしながら、教員数で見た場合には文学部の科目を担当している教員の 80% は兼任教員である。兼任は専任と比べて担当コマ数は少ないものの、兼任による授業は文学部開設の科目ではかなりの割合を占めている。オンライン授業を実施する基礎的な条件となったオンライン会議システムや LMS の利用に関する研修は、4 月当初の段階で、専任のほうが経験もあり、実際に使えるようになっていたのに対し、兼任では授業開講までの短い時間にこれらの習得や機器の購入などを行う必要があった者が多かったと見られる。

4. 学生調査の結果

4.1. 学生調査の基礎的統計

では次に学生調査の結果について見ていこう。学生調査も、教員調査同様に①基本的属性、② PC 等の保有状況や通信環境、およびオンライン授業を受けるための環境、③ PC 操作などのスキルおよびスキルを補うことができる友人関係について尋ねた。

まず専攻や学年、居住形態といった基礎的な点について確認をした上で、次節にてオンライン授業への準備状況について検討を行う。

回答学生の所属専攻を見たところ、表 4-1 のようになった。

回答者の分布を専攻別に見ても、それほど偏りは大きくなく、ほぼ全専攻から一定程度の回答を得られている。

次に学年を見ると（表 4-2）、1 年生が 30.0%とやや多く、続いて 2 年生 27.2%，4 年生以上 22.2%，3 年生 20.5%となっていた。在籍者の分布と比べても、回答者の分布は 1 年生が多く 3 年生以上が少なくなっている。

在籍者数から回答率を算出したところ、1 年では 77.4%と約 4 分の 3 が回答している。回収率は学年が上がるにつれて低下し、4 年生以上では 51.2%とほぼ半数であった。

さらに、学生の学習環境に大きく影響をもたらすと考えられるため、居

表 4-1 専攻別 回答者数

	N	%	在籍者数	%
国文学	269	10.7	407	10.6
英語文学文化	361	14.4	551	14.4
ドイツ語文学文化	116	4.6	195	5.1
フランス語文学文化	192	7.7	327	8.5
中国言語文学文化	120	4.8	191	5.0
日本史学	314	12.5	423	11.0
東洋史学	130	5.2	203	5.3
西洋史学	131	5.2	209	5.4
哲学	143	5.7	214	5.6
社会学	226	9.0	358	9.3
社会情報学	230	9.2	328	8.5
教育学	111	4.4	193	5.0
心理学	161	6.4	240	6.3
計	2504	100	3839	100

表 4-2 学年別 回答者数

	度数	%	在籍者数	%	回答率
1年生	752	30.0	972	25.3	77.4
2年生	682	27.2	975	25.4	69.9
3年生	514	20.5	804	20.9	63.9
4年生以上	557	22.2	1088	28.3	51.2
計	2505	100.0	3839	100	65.3

表 4-3 学年別 居住形態

	実家	一人暮らし	寮	その他	N
1年生	72.9%	17.3%	6.0%	3.9%	752
2年生	66.7%	27.1%	4.4%	1.8%	682
3年生	66.0%	26.1%	3.7%	4.3%	514
4年生以上	65.7%	28.7%	3.1%	2.5%	557
計	68.2%	24.3%	4.4%	3.1%	2505

住形態を確認したものが表 4-3 である。

全体としては 68.2%が実家で生活しており、一人暮らしは 24.3%と約 4分の 1 だった。

学年ごとにみると、1年生で実家で生活している学生が 72.9%と多く、寮で生活している学生も 6.0%と他の学年に比べて多い。

4.2. 機器の所有や通信環境

4.2.1. ハードウェアや通信環境

まずは、オンライン授業を受ける上で必須となる PC などの機器の所有について確認した。

学生全体では 70.9%が個人専用の PC を所有していた。しかし、1年生ではこの時点の PC 所有率が 60%未満とやや低い。ただし、購入予定ま

表 4-4 学年別 情報機器の所有

	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生以上	計
個人専用のノート PC を持っている	58.1%	74.0%	75.5%	80.1%	70.9%
帰宅すればデスクトップ PC を比較的自由に利用できる	12.6%	8.1%	7.6%	7.7%	9.3%
帰宅すればデスクトップ PC を利用できるが、他の家族との調整が必要である	7.0%	7.9%	5.3%	4.1%	6.3%
iPad などのタブレット（キーボードもついているもの）を所有している	2.0%	3.1%	2.7%	3.1%	2.7%
上記のいずれかを購入予定である／入荷待ちである	13.7%	0.4%	0.6%	0.2%	4.4%
キーボードのないタブレット、もしくはスマートフォンのみ所有している	6.0%	6.0%	7.0%	4.1%	5.8%
上記のすべてを所有していない	0.5%	0.1%	0.6%	0.5%	0.4%
上記のすべて、入手の見込みがない	0.0%	0.3%	0.8%	0.2%	0.3%
N	752	682	514	557	2505

たは入荷待ちが 13.7% と多いことから、70% 程度は授業開始前後には所有の見込みがあったと思われる。受講に際して最も課題となる「上記すべてを所有していない」「入手の見込みがない」は、0.7% と非常に少ないものの、数にすると 26 人となっており、これらの学生への支援が必要であることがうかがえた。

さらに、オンライン授業の受講において、十分とはいえない「調整が必要」とキーボードのないタブレットやスマートフォン、所有していない、入手の見込みがない、といった回答をまとめると、1 年生の 13.5%、2 年生で

は 14.3%，3 年生の 13.7%，4 年生以上では 8.9%と，学生の 1 割前後がオンライン授業を受けるにあたって不十分な機器の状況にあることが分かった。

また，居住形態によって分けてみた結果が表 4-5 である。

実家で生活している学生は，個人専用のノート PC を持っている者が 65.7%と少なく，家族と共用している者が比較的自由に利用できる者と調整が必要な者を合わせて 20.1%と多くなっている。一人暮らしでは 82.6%が個人専用のノート PC を，また 4.9%がデスクトップ PC を自宅に持ち，入荷待ちも含めると 90%近くが PC を所有できているが，「すべてを所有していない」「入手の見込みがない」学生もあわせて 1.5%と最も多くなっている。

また，寮に住む学生は PC の所有率は 80.2%と高いものの，タブレットもしくはスマートフォンのみの学生が 11.7%と他のカテゴリーと比較して多かった。

さらに，所有している PC にマイクやカメラがついているかについても

表 4-5 居住形態別 情報機器の所有

	実家	一人暮らし	寮	その他	計
個人専用のノート PC を持っている	65.7%	82.6%	80.2%	79.2%	70.9%
帰宅すればデスクトップ PC を比較的自由に利用できる	11.4%	4.9%	3.6%	3.9%	9.3%
帰宅すればデスクトップ PC を利用できるが，他の家族との調整が必要である	8.7%	0.8%	0.9%	2.6%	6.3%
iPad などのタブレット（キーボードもついているもの）を所有している	3.0%	2.1%	0.9%	1.3%	2.7%
上記のいずれかを購入予定である／入荷待ちである	4.9%	3.3%	1.8%	5.2%	4.4%
キーボードのないタブレット，もしくはスマートフォンのみ所有している	5.7%	4.8%	11.7%	7.8%	5.8%
上記のすべてを所有していない	0.4%	0.8%	0.0%	0.0%	0.4%
上記のすべて，入手の見込みがない	0.1%	0.7%	0.9%	0.0%	0.3%
N	1708	609	111	77	2505

確認を行った。この質問については、2年生以上ではアンケートの設定ミスがあったため、1年生についてのみ集計を行ったが、カメラとマイクの両方がそろっている学生は35%程度であり、カメラかマイクのどちらもない学生が6.7%となっていた。ただし、「わからない」という回答が24.6%とかなり多く、あとでも触れるが、学生がこれらの機器を確認する知識やスキルにおいて不十分な状況にあったことがうかがわれた。

4.2.2. オンライン授業を受ける環境

では次に、オンライン授業を受けるための空間的な環境について見ていこう。キャンパスでの授業であれば、学生たちはプライベートな生活空間から切り離されて授業を受けることができる。しかし、オンライン授業では、授業を受ける場所が自宅等にあるとは限らない。また、インターネット回線への接続についてもコストがかかるため、最低限の回線使用での契約をし、大学内では学内無線LANを利用したり、公共の無料Wi-Fiを利用する者も多い。そこで、まず動画を視聴したり、発言をするといった授業への参加が可能な空間を、学生たちが十分に持ち得ていたのか、また、接続回線や使用制限についても確認を行った。

表4-6を見ると、学年による差はそれほど大きなものではないが、学年が上がるほど個室がない者がやや多く、「商業施設や公共施設」または「思い当たる場所はない」と回答する者が多い傾向が見られた。

居住形態別に集計したところ（表4-7）、特に寮に住む学生では、半数程度は支障がないものの個室がなく、公共スペースもしくは思い当たる場所がないと回答する学生が多く見られた。寮は共有のスペースもあるものの、個室がなく、このような環境の学生にとっては、やり取りを行うことが困難であったことが分かる。

また、接続回線について尋ねた結果（表4-8）、オンライン会議システ

表 4-6 学年別 オンライン授業に参加できる場所

	自宅や寮などの個室（音声を出したやりとりに支障がない）	寮などの公共スペース（まあまあ支障はない）	カフェテリアや近所の図書館など商業施設や公共施設	思い当たる場所はない	N
1年生	91.4%	3.3%	1.5%	3.9%	752
2年生	88.9%	2.5%	2.6%	6.0%	682
3年生	88.1%	2.7%	2.9%	6.2%	514
4年生以上	88.2%	1.4%	4.1%	6.3%	557
計	89.3%	2.6%	2.7%	5.5%	2505

表 4-7 居住形態別 オンライン授業に参加できる場所

	自宅や寮などの個室（音声を出したやりとりに支障がない）	寮などの公共スペース（まあまあ支障はない）	カフェテリアや近所の図書館など商業施設や公共施設	思い当たる場所はない	N
実家	90.7%	0.9%	2.9%	5.4%	1708
一人暮らし	92.1%	1.1%	2.5%	4.3%	609
寮	49.5%	36.9%	1.8%	11.7%	111
その他	93.5%	0.0%	0.0%	6.5%	77
計	89.3%	2.6%	2.7%	5.5%	2505

ムを利用した授業や動画配信といった回線使用量の多い授業を受講するのに十分な容量として考えられる 50GB 未満の契約となっている学生がどの学年でも 10%強いたことがわかる。これらの学生への支援が必要であることがわかり、文学部でも前期中にポータブルの Wi-Fi ルーターに契約し、学生への貸し出しをすることなどにつながった。

表 4-8 学年別 接続回線の制限

	1年生	2年生	3年生	4年生以上	全体
自宅や寮に、光ファイバー・ケーブルテレビなど固定の高速回線が来ており、それにスマートフォンやPCをWi-Fiでつなぐことで動画の視聴に問題がない	82.3%	77.4%	78.4%	82.4%	80.2%
モバイルWi-Fiルータ（WiMaxなど速度制限なしで使える容量が50GB以上のもの）	4.1%	5.4%	5.8%	4.7%	5.0%
モバイルWi-Fiルータ：速度制限無しで使える容量が月50GBに満たないもの	2.4%	4.3%	2.5%	4.1%	3.3%
スマートフォン（月50GB以上）	1.9%	3.5%	3.5%	3.6%	3.0%
いずれもなし／わからない	9.3%	9.4%	9.7%	5.2%	8.5%
N	752	682	514	557	2505

4.3. ITスキル

PCや環境が整っていても、本人のITスキルが不十分であれば、オンライン授業の受講に際して起こると想定されるトラブル等を解決することができない。通常であれば、ITセンターや友人らに相談することで解決できることも多いと思われるが、入構規制がかかる中ではそれらは困難である。そこで、まずは学生のPCに関する全般的なスキルについて、次いでオンライン授業で最も多く利用されると思われるLMS（manaba）の利用歴を確認した。

4.3.1. 全般的 PC スキル

はじめに、全般的な IT スキルについて確認したところ、表 4-9 の通りとなった。

「トラブルが起こった時に自分で調べて解決することができる」と回答した学生は全体では 18.6%であったが、学年が上がるにつれてできる学生が増加している。1 年では 15.2%であるが、4 年では 26.0%まで上昇する。また、「キーボードのついた PC の利用経験がほとんどない」と回答した者も 1 年では 38.7%と 4 割近いが、学年が上がるにしたがってこの割合は低下し、4 年生以上では 5.2%となっている。これらの結果から、大学生活を通じて PC 操作のスキルを獲得している様子が見えてくる。また、「一般的なソフトウェアで作業ができる」については、1 年生は 46.1%と低いが、2 年生以上はそれぞれ 67.2%、67.3%、68.8%と高くなっており、特に初年次にこれらのスキルの獲得が行われてきたことが分かる。

表 4-9 学年別 IT スキル

	トラブルが起こった時に自分で調べて解決することができる	Microsoft Office など一般的なソフトウェアで作業ができる	キーボードのついた PC の利用経験がほとんどない	N
1 年生	15.20%	46.10%	38.70%	752
2 年生	15.80%	67.20%	17.00%	682
3 年生	19.30%	67.30%	13.40%	514
4 年生以上	26.00%	68.80%	5.20%	557
計	18.60%	61.20%	20.20%	2505

4.3.2. LMS (manaba) の利用経験

では、LMS の利用経験についてはどうだろうか。表 4-10 では、学年別に manaba の利用履歴について尋ねた。1 年生については、利用経験がな

表 4-10 学年別 manaba 利用経験

	教員からの指示だけでなく、自主的にグループワークに使ったことがある	教員から指示されたことについては、利用したことがある (respon による出席確認, レジюме入手, レポート提出など)	ほとんど利用したことがない	新入生であるため、利用経験がない	N
1 年生	0.40%	5.50%	2.90%	91.20%	752
2 年生	6.30%	87.80%	5.90%	0.00%	682
3 年生	5.40%	90.10%	4.50%	0.00%	514
4 年生以上	7.20%	89.80%	3.10%	0.00%	557
計	4.60%	64.00%	4.10%	27.40%	2505

い者が9割以上となっている。

2年生以上を見ると、「利用したことがない」者の割合は低く、学年が上がるにつれて低下しており、ほとんどの学生は利用経験があったことがわかる。とはいえ、そのほとんどは、教員の指示を受けての利用がほぼ9割である。自主的なグループワークなどでの利用率は全体の5%程度であるが、4年生以上では7.2%とやや多くなっており、学年とともにより積極的な利用が進んでいることがうかがえる。

4.4. 友人関係

オンライン授業を受講するに際して起こりうることとして、PCや回線接続などについてのトラブルがある。大学のキャンパスであれば、ITセンターや生協によるサポートや教員や事務棟によるサポートの機会もあるだろうが、キャンパスに入構できない状況では、そのようなサポートは期待できない。そこで最後に、PCに関するトラブルなどを相談する友人ネットワークがどの程度あるのかについて尋ねた。

1年生では「すぐに相談できる相手は思い当たらない」と回答する者が

表 4-11 学年別 サポートネットワーク

	友人、知り合いが 10名以上いる	何人かの友人が いる、もしくは遠隔 であっても相談で きる相手がいる	すぐに相談できる 相手は思い当たら ない	N
1年生	8.4%	56.9%	34.7%	752
2年生	20.2%	59.5%	20.2%	682
3年生	18.5%	62.1%	19.5%	514
4年生以上	19.7%	62.1%	18.1%	557
計	16.2%	59.8%	24.0%	2505

34.7%と3分の1を超えている。しかし、2年生以上ではほぼ2割程度となっている。逆に「10人以上いる」という者も、1年生では8.4%と少ないが、2年生以上ではおおむね20%前後となっている。ただし、学年が上がるにつれて増加するのではなく、2年生以上はほぼ同様の傾向であり、人間関係が比較的安定していると考えられる。

以上の結果から、学生の多くはPCやインターネット接続回線が確保されていたものの、どれも持たない学生もわずかながらいる。また、専用PCを持たない学生は、インターネット回線への接続環境や、個室など授業を受けるための環境もない学生がおり、複合的に条件が整っていない学生が一定程度いることが分かった。

また、わずかながらいるPCを持たない学生は、PC操作やトラブル解決のスキルやLMS（manaba）の経験率も低く、これらの層に集約的に困難があったと考えることができる。

文学部でも6月以降、Wi-Fiルーターの貸し出しなどを行い、30名程度の利用があった。上記のような学生にも一助にはなったと思われるが、PC本体の貸し出しなど、より積極的な支援やPC操作に関わる支援の体

制を構築する必要があると思われる。

5. 授業アンケートの結果

次に急遽のオンライン化がなされた2020年度前期の授業が、学生にはどのように評価されていたのか、学期末の授業アンケートの結果から見ていこう。なお、以降で取り上げる授業アンケートの結果については、中央大学のFD活動の成果を記したHPに記載の内容を参照している。

その内容は、主に5つのパートからなり、具体的には「授業について」「担当教員について」「履修者（学生自身）について」「オンライン授業について」「総評」であり、質問は全部で20問であった。一部の複数回答形式の質問を除いて、基本的には7段階の選択肢から回答する形式で統一されており、点数化して平均値の比較などを行うことができる。ここでは、目的に鑑みて、適宜順番を入れ替えながら結果を紹介していこう。

5.1. 「総 評」

「Q20.この授業に対する総合的な満足度について」という質問を見ると、急遽なされた授業のオンライン化であったにもかかわらず、総じてそれなりに高い満足度が得られていたことがうかがえる（表5-1）。最も評価の高い「7.非常に満足している」は21.67%、それに次ぐ「6.満足している」

表5-1 オンライン授業の満足度

	1.全く満足していない	2.満足していない	3.あまり満足していない	4.どちらともいえない	5.やや満足している	6.満足している	7.非常に満足している	N
Q20 授業の総合的な満足度 (平均点 5.4)	2.15%	3.10%	5.24%	9.10%	21.57%	37.17%	21.67%	15435

も 37.17%の回答が寄せられており、これらの回答について「1～7点」を与えて点数化してみても、全体の平均値は5.4となっており（2019年度前期は5.6／後期は5.7であり、以下文中では必要に応じて数値のみ記していく）、各教員の献身的な努力の成果が表れた結果といえるのではないだろうか。

5.2. 「オンライン授業について」

さて、授業のオンライン化にあたって、どのタイプの授業が実施されたのか、学生たちの認識に基づいて振り返っておきたい（表5-2）。授業によっては、複数のタイプを使い分けていたことも想定できるため、複数回答形式の質問と、もっとも当てはまるものを一つだけ尋ねる質問をそれぞれ回答してもらった。具体的には、「Q15. この授業は、多様なメディアを活用するオンライン授業として、以下のどのタイプの授業でしたか。当てはまるものを全て選んでください。」「Q16. 上記の質問で選んだ授業のタイプのうち、この授業について、もっとも当てはまるものを一つだけ選んでください。」という二つの質問である。

複数回答形式で見ると（Q15）、最も多かったのは「双方向型授業（教員と学生がインターネットを介して繋がった状態で、リアルタイムに音声や動画で行う授業のこと）」37.49%であり、次いで「自習中心型授業（教

表5-2 オンライン授業の実施形態

	双方向型 授業	動画配信 型授業	資料配信 型授業	自習中心 型授業	その他	N
Q15 授業タイプ として当てはまる もの（複数回答）	37.49%	13.81%	33.91%	37.27%	1.22%	15435
Q16 最も当ては まる授業タイプ	32.47%	10.07%	25.84%	30.55%	1.06%	15435

科書やその他の教材などによる自習、演習などを中心として、別の手段（メールや掲示板等）で質問や議論を行う授業のことに」37.27%、「資料配信型授業（ナレーション付の講義資料（パワーポイント等）を視聴して、別の手段（メールや掲示板等）で質問や議論を行う授業のことに」33.91%となっていた。この順序は、もっとも当てはまる授業タイプを一つだけ尋ねても同じであり（Q16）、「双方向型授業」32.47%、「自習中心型授業」30.55%、「資料配信型授業」25.84%となっており、この3つをオンライン授業における中心的なタイプとして位置付けてよいだろう。

いわゆる「データダイエット」の観点からは、「資料配信型授業」や「自習中心型授業」が推奨されたが、文学部は少人数からなるゼミナールや、語学の授業が多く存在することもあり、「双方向型授業」の割合が最も多くなった可能性があるだろう。

なお「動画配信型授業（授業を録画したビデオを視聴して、別の手段（メールや掲示板等）で質問や議論を行う授業のことに）」については、教員が教室で行った授業を録画した動画を配信するタイプなどが当てはまるのだが、2020年度の前期中は、キャンパスへの立ち入りが強く制限されていたことを振り返ると、実際にこのタイプの授業がこれだけの割合行われていたかどうかはやや不明なところもある。

むしろ、定義としては「資料配信型授業」に当てはまる、音声付パワーポイント動画を用いたオンデマンド配信型授業を、「動画配信型授業」と間違えて回答した可能性もあり、この点を加味すると、「資料配信型授業」は、「双方向型授業」と同程度の割合を占めていた可能性もありえるが、いずれにせよ、「データダイエット」が叫ばれていた状況下ではあったが、文学部では「双方向型授業」がそれなりの大きな割合を占めていたということがいえるだろう。

オンライン化の影響に関して、そのメリットに関する項目（Q17、複数

回答)を見ると、最も多く挙げられていたのは「1.自分のペースで学習できた」63.87%、次いで「2.大学の教室に行かずとも、どこでも学習できて便利だった」49.92%となっていた。

一方、デメリットに関する項目(Q18, 複数回答)を見ると、「2.ほかの受講生と直接会えなかったのが不便だった」50.92%、「3.教室という空間にいたほうが学習しやすかった」37.65%、「1.担当教員に直接質問などをできなかったのが不便だった」29.56%という順となり、総じてリアル空間におけるインタラクティブな関わりを求めているのであろう様子が見えがえる結果となった。

表 5-3 オンライン授業のメリット/デメリット, インターネット接続状況

	1.自分のペースで学習できた	2.どこでも学習できて便利	3.教材がネットで入手できて便利	4.質問しやすかった	5.その他	N		
Q17 オンライン授業のメリットとして当てはまるもの(複数回答)	63.87%	49.92%	18.56%	10.35%	4.19%	15435		
	1.直接質問できず不便	2.ほかの受講生に会えず不便	3.教室のほうが学習しやすい	4.課題の負担が大	5.その他	N		
Q18 オンライン授業のデメリットとして当てはまるもの(複数回答)	29.56%	50.92%	37.65%	22.57%	10.04%	15435		
	1.全く順調ではなかった	2.順調ではなかった	3.どちらかといえば順調ではなかった	4.どちらともいえない	5.どちらかといえば順調だった	6.順調だった	7.非常に順調だった	N
Q19 授業受講時のインターネットの接続状況(平均点 5.7)	0.90%	1.78%	3.76%	8.16%	18.28%	35.15%	31.96%	15435

この結果は、教員に対するコメントや質問に関する項目にも表れているといえよう。教員からすれば、場合によっては、オンライン化によって、よりダイレクトかつ幅広く学生たちの反応を得られるようになったと感じているかもしれないが、メリット項目で「4. オンライン授業のほうが教員に質問などをしやすかった」と答えた者は10.35%に過ぎず、逆にデメリット項目で「1. 担当教員に直接質問などをできなかったのが不便だった」を選んだものは29.56%と4分の1を超えていたことから分かるように、学生たちは、やはり不便を感じているようである。

また、「4. オンライン上で提出を要求される課題の負担が大きかった」というデメリット項目を選んだ者は22.57%と決して多くはなかったが、だからといって、「巷間よく言われるほど学生はオンライン授業の課題に苦しんでいないのではないかと解釈するのは早計だろう。個々の授業の課題に対する負担感のさほど大きくなくとも、例えば学期末試験の代替などとして、同じタイミングで一斉に課された場合には、かなりの負担が生じる可能性がある。よって、この点は、個々の教員レベルだけでなく、専攻内や学部全体のレベルなどでの調整が求められる事項といえるのではないだろうか。

なお「Q19. この授業を受講した際の、インターネットの全般的な接続状況はいかがでしたか。授業全体を通した経験でお答えください。」という項目については、総じて安定していた様子がうかがえるが、一方で「1. 全く順調ではなかった」～「3. どちらかといえば順調ではなかった」を足し合わせると6.44%（「4. どちらともいえない」も加えると14.60%）存在しており、今後もこれらの学生たちに対する支援策は検討する必要があるだろう。

5.3. 「授業について」

さらに、授業内容に関する項目について、まずオンライン化に関わるものとして、「Q1. 講義要項（シラバス）に示されていた学習目標や内容と合致していた（ただし、新型コロナウイルス感染症の拡大後に、変更されたシラバスの内容などを踏まえて回答してください）」の結果を見ると、「7. 非常にそう思う」が24.48%，それに次ぐ「6. そう思う」も43.20%の回答が寄せられており、これらの回答を点数化してみても、全体の平均値は5.7と比較的高く（2019年度は前後期とも5.8）、シラバスの内容さらにはそのオンライン化による変更点についても、おおむね周知はなされていたものと理解してよいのではないだろうか（表5-4）。

またそれ以外の項目についても、回答分布の詳細は表をご参照いただくとして、それぞれ点数化した場合の全体の平均値を示すと、「Q2. 学生が

表5-4 オンライン授業の内容への評価

	1. 全く そう思 わない	2. そう 思わな い	3. あま りそう思 わない	4. どち らともい えない	5. やや そう思 う	6. そう 思う	7. 非常 にそう 思う	N
Q1 シラバスとの合致（平均的5.7）	1.04%	1.44%	2.59%	10.59%	16.68%	43.20%	24.48%	15435
Q2 能動的に参加したくなる授業だった（平均点5.3）	2.56%	2.82%	6.28%	12.93%	23.04%	32.03%	20.34%	15435
Q3 授業内容を理解、習得できた（平均点5.4）	1.53%	2.09%	4.89%	8.81%	29.37%	35.72%	17.58%	15435
Q4 新しい知識の習得、自身の能力の高まりや成長につながった（平均点5.6）	1.50%	1.65%	3.85%	7.26%	22.82%	35.52%	27.40%	15435

能動的に参加したくなるような授業であった。」が他と比べるとやや低くて5.3だが（同じくいずれも5.4）、「Q3.この授業の内容を理解し、習得できた。」は5.4（同じく5.5）、「Q4.この授業によって、新しい知識の習得、または、自身の能力の高まりや成長につながった。」は5.6（同じく5.7）となっていて、おおむねそれなりに高い水準を維持できていたことがうかがえる。この点は、先に触れた、総合的な満足度にも表れていたように、各教員の努力によって、オフラインの対面授業と比べても、見劣りのしない授業のクオリティがそれなりに維持できていたことの表れといえるのではないだろうか。

5.4.「担当教員について」

担当教員については、6つの項目を尋ねているが、先に、回答の分布の傾向が他と異なる「Q7.この授業の進行速度について。」について触れておけば、「4. ちょうどよい」が76.49%と4分の3以上を占め、得点化した全体の平均値でも4.2となった（2019年度前期、後期はそれぞれ4.2／4.1）。

それ以外の項目についても、詳細な回答分布は表5-5・6をご参照いただきたいが、得点化した全体での平均値で見ても、「Q5.担当教員の話し方は聞き取りやすく、理解しやすいものだった。」が5.3（同じく5.6／5.7）、「Q8.担当教員は学生が集中できるように学習環境の維持に努めていた。」が5.4（同様に5.5／5.6）と、ほかの項目よりはやや低くなっているが、これらは特に「自習中心型授業」などでは伝えにくいという点も影響していよう。ほかの項目については、「Q6.担当教員が熱意をもって授業を行っていた。」が5.8（2019年度前後期は、いずれも6.0）、「Q9.教科書や配布・提示資料（パワーポイント・ビデオ等）は授業内容の理解に役に立った。」が5.7（同様に、いずれも5.7）、「Q10.担当教員は学生から

表 5-5 オンライン授業の担当教員について

	1. 全く そう思 わない	2. そう 思わな い	3. あま りそう思 わない	4. どち らともい えない	5. やや そう思 う	6. そう 思う	7. 非常 にそう 思う	N
Q5 担当教員の話し方は聞き取りやすく、理解しやすかった(平均5.3)	2.71%	1.81%	3.51%	23.84%	14.03%	28.24%	25.85%	15435
Q6 担当教員は熱意をもって授業を行っていた(平均点5.8)	1.36%	1.37%	2.40%	9.54%	15.94%	35.25%	34.14%	15435
Q8 担当教員は学習環境の維持に努めていた(平均点5.4)	1.72%	1.75%	3.80%	18.93%	19.61%	33.41%	20.78%	15435
	1. 非常 に遅い	2. 遅い	3. やや 遅い	4. ちょう どよい	5. やや 速い	6. 速い	7. 非常 に速い	N
Q7 授業の進行速度(平均点4.2)	0.41%	0.65%	3.06%	76.49%	13.93%	3.69%	1.76%	15435

表 5-6 オンライン授業の教材、担当教員の態度

	1. 全く そう思 わない	2. そう 思わな い	3. あま りそう思 わない	4. どち らともい えない	5. やや そう思 う	6. そう 思う	7. 非常 にそう 思う	N
Q9 教科書や配布・提示資料は役に立った(平均点5.7)	1.33%	1.42%	3.10%	8.72%	17.76%	35.94%	31.73%	15435
Q10 担当教員は質問や意見を受け付け、フィードバックしていた(平均点5.6)	2.24%	2.18%	4.10%	12.90%	16.22%	30.77%	31.58%	15435

の質問や意見を受け付け、適切に対応やフィードバックをしていた。」が5.6と、それぞれ5点台後半に達しており、教員の熱意、教材のクオリティ、フィードバックについては、それなりの評価を得たと理解してよいものと思われる。

5.5. 「履修者（学生自身）について」

次いで学生の受講態度に関する項目で、「Q11. この授業に対する出席率について（この場合の出席とは、リアルタイムのオンライン授業に参加する以外に、課題提出型授業で期限内に課題を提出することも含みます）。」を見ると、回答したものだけの傾向である点は注意すべきだが、「7. 100%だった」が81.11%と多くなっていた。また「Q12.1 回の授業に対する予習・復習の平均時間について。」は「2. 1時間未満」が36.59%と最も多かった（表5-7）。

なお「Q13. 課題（宿題、レポートの提出、予習・復習など）の量について。」は、「4. 適切」が67.92%と最も多かったものの、「5. やや多い」も16.34%いたことから、提出時期などが重なった場合に、それなりの負担が生じていたであろう可能性は想像しておく必要がある。

これらについても、平均値を過年度と比較しておくとし、出席率（Q11）が2020年度前期／2019年度前期／後期の順に6.8／5.9／5.6、予習復習の平均時間（Q12）2.7／2.1／2.2、課題の量（Q13）4.4／4.0／4.0となっていた。

いずれにせよ、授業アンケートの結果から総じて言えることとして、2020年度前期の授業については、予期せぬ新型コロナウイルス感染症が拡大する状況下において、急遽迫られた授業のオンライン化であったにもかかわらず、文学部全体としては、各教員の献身的な努力もあって、どうか対面授業と遜色のない授業のクオリティを維持することが出来たと

表 5-7 オンライン授業の受講態度など

	1. 0% だった	2. 20% 未満だ った	3. 20% 以上だ った	4. 40% 以上だ った	5. 60% 以上だ った	6. 80% 以上だ った	7. 100% だった	N
Q11 授業の出席率（平均点 6.8）	0.19%	0.19%	0.15%	0.48%	2.03%	15.85%	81.11%	15435
	1. 全く しな か った	2. 1 時 間未 満	3. 1 時 間以 上 2 時 間未 満	4. 2 時 間以 上 3 時 間未 満	5. 3 時 間以 上 4 時 間未 満	6. 4 時 間以 上 5 時 間未 満	7. 5 時 間以 上	N
Q12 授業 1 回あたりの予習・復習の平均時間（平均点 2.7）	13.18%	36.59%	31.29%	12.59%	3.97%	1.19%	1.21%	15435
	1. 非常 に少 ない	2. 少 ない	3. やや 少 ない	4. 適 切	5. やや 多 い	6. 多 い	7. 非常 に多 い	N
Q13 課題の量（平均点 4.4）	0.59%	1.08%	2.23%	67.92%	16.34%	6.91%	4.94%	15435

いってもよいのではないだろうか。

しかしながら、この困難な状況はさらに長引くことが予想されており、なおかつ、2020 年度後期以降は、学生たちがオンライン授業を評価する眼もより一層シビアになってくることが予想されるため、今後はさらに増して、自覚的に対策に取り組んでいくことが求められているといえるだろう。

6. ま と め

最後に、2020 年度前期の授業について、流れを押さえておこう。

2020 年 4 月 7 日に「新型コロナウイルス感染症にかかる緊急事態宣言」が発令され、中央大学においてもそれをうけて全校地を閉鎖し、学生のキャンパスへの入構が禁止され、教職員の入構も制限された。また、特別措

置期間が終了する5月13日には、前期の授業をすべてオンラインで実施するという方針が決定された。文学部における教員調査や学生調査の結果は、2週間の特別措置期間といった短期的な対応だけではなく、長期にわたるオンライン授業を実施する／受講するための条件整備という点でも有用な情報源となりえた。

学生調査の結果から、オンライン会議システムを用いた双方向型授業の場合に、受講が困難な学生が一定程度いることが明らかになった。このため、文学部としては、PC使用時間の調整が容易であり、かつデータ容量の負荷の低い資料配信型や自習型を中心として実施し、オンライン会議システムを用いた授業を実施することを最低限にとどめるといった方針をとることとなった。

他方、教員調査からは、特に兼任を中心としてmanabaやオンライン会議システムの利用経験が乏しい教員がいることから、研修やサポートの必要性が導かれた。これをうけて、各専攻で、兼任へのmanabaやWebexの講習会を開くといった取り組みが行われた。また、最低限の双方向性を確保できるように、manabaでの質問の受付を推奨するなど、学部としての授業の水準の維持を目指した。

しかしながら、文学部においてはこれらの支援は、主に各教員および所属専攻による支援が中心であり、組織的なサポート体制を構築することは困難であった。このような状況の背景として、4月7日からの緊急事態宣言により、事務方についても出勤を最小限にとどめるといった措置が取られたこともあろう。しかし、今後もオンライン授業を継続していくのであれば、事務も含めた体制作りをすることが求められる。

文学部では、開設科目をできるだけ休講にせずに関講するという方針のもと、1000近い科目が、担当教員の努力によってオンラインで開講されることとなった。また、それらの授業が、オンラインという新たな形態で、

どのように行われることになるかを、シラバスに追記するといった取り組みを行った。また、WGが中心となって、特に授業開始までに手元に届くことが必須となる語学や体育等の教科書の販売体制を生協とともに構築するなどした。このような取り組みによって、学生が前期開講のオンラインでの授業の方法について、登録する前に知ったり、教科書を購入することが可能になった。

このような学部としての取り組みと、個々の教員の努力によって、オンライン授業の開講当初には様々なトラブルはあったものの、おおむね順調に授業が実施された。このことは、学生対象の授業アンケートからも見て取ることができる。

授業アンケートの結果からは、学部として推奨した資料配信型・自習中心型の授業といった、キャンパスで通常受けている授業とはやや異なるタイプの授業を中心とした授業が約半数ほどであったことが示された。同時に、オンラインというこれまでほとんど経験のなかった授業においても、前年度までとほとんど変わらない評価が得られたことが示されている。このような結果に至るまでの個々の教員や専攻の努力があつてのこの結果であろう。他方で、オンライン授業における教員への質問など、双方向的な活動についての課題などが見いだされている。

新型コロナウイルス感染症の拡大に端を発したオンライン授業の導入であったが、本論文を執筆している2020年9月には、感染症は収束しておらず、後期も一部の授業を除き原則オンラインという方針が維持されている。2021年度についても、キャンパスで実施できる授業の範囲が拡大するとしても、これまでのようにすべてを対面式に戻すことは困難であることが予想される。緊急措置であったオンライン授業が恒常的なものとなるとしたら、実施された授業への学生のまなざしも現在よりも厳しくなることが予想される。今後は、「いかにオンライン授業を実施するか」だけで

はなく、よりよいオンライン授業やオンラインだからこそできる授業といった取り組みも必要になってくるだろう。こういった授業を開発し、普及させるためには、個々の教員の努力はさることながら、学部として、大学としての基盤整備が求められるだろう。

最後に、突然の「オンライン授業」に対して、それぞれのもつ条件のもとで、献身的に実施に向けて努力した教員と、慣れない授業を受けながら、その授業内容の理解に向け努力した学生に対して、最大限の賛辞を贈りたい。

参考資料

2020年度 文学部授業アンケート結果 (<https://www.chuo-u.ac.jp/aboutus/efforts/fd/questionnaire/letters/2020/> 最終アクセス日, 2020年9月28日)

2019年度 文学部授業アンケート結果 (<https://www.chuo-u.ac.jp/aboutus/efforts/fd/questionnaire/letters/2019/> 最終アクセス日, 2020年9月28日)